

研究・調査報告書

報告書番号	担当
25	滋賀医科大学福祉保健医学講座
題名 (原題/訳)	
Amount and type of alcohol and risk of dementia. The Copenhagen City Heart Study. アルコールの量・種類と痴呆のリスク ; コペンハーゲン市中心臓研究	
執筆者	
Truelsen T, Thudium D, Gronbaek M, et al	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Neurology 2002; 59: 1313-19	
キーワード	
アルコール、コホート内症例対照研究、痴呆、ワイン	
<p>背景</p> <p>飲酒と痴呆の関連には一定の見解がないが、適量の飲酒は良好な認知機能と関連するという既存の報告もある。本研究では、飲酒の量、頻度、アルコール飲料の種類が痴呆の発症と関連しているかどうかを明らかにすることを目的とした。</p> <p>対象と方法</p> <p>The Copenhagen City Heart Study は 1976 年にコペンハーゲン市内に住む 19,698 人の住民を対象に開始された循環器疾患のコホート研究である。対象者は定期的に呼び出されて検査を受けることになっており、1991 年から 1994 年に実施された第 3 回目の検査時に、65 歳以上の人を対象として Mini-Mental State Examination (MMSE) が計画された。対象者 2,784 人のうち拒否者等を除く 1,892 人に MMSE が行われ、最終的に 1,709 人が解析対象となった。このうち 261 人が MMSE で 24 点以下であり、これらの人をクリニックに呼び出して診察を行い“痴呆あり群”の確定を行った。クリニックに来所しなかった人が 51 名おり、これらは“痴呆なし群”に分類された。研究手法はコホート内症例・対照研究 (nested case-control study) とし、最終的に確定された“痴呆あり群”83 人と“痴呆なし群”1,626 人の過去 (1976 年から 1978 年) の飲酒習慣を比較した。飲酒習慣は問診で求められ、飲酒機会について“ほとんど飲まない”、“毎月飲む”、“毎週飲む”、“毎日飲む”に分けられ、毎日飲む場合には 1 週間あたりの飲酒量を“drink”数 (1drink=9~13g のエタノール) で求めた。</p> <p>結果</p> <p>性、年齢、教育年数、脳卒中既往、居住状況 (独居かどうか)、収入、収縮期血圧値、喫煙をロジスティック回帰分析で調整して飲酒の痴呆に対するオッズ比を算出した。全アルコール摂取量で見ると、週 1~7 drink を基準群とした場合、痴呆のオッズ比は 8~14 drink で 0.81、15~21 drink で 1.74、22drink 以上で 1.29 でありいずれも有意差はなかった。しかしアルコールの種類別に検討すると、“ほとんど飲まない”を基準群とした場合、“ワインを毎月飲む”場合のオッズ比は 0.43 (95%信頼区間 0.23-0.82)、“ワインを毎週飲む”場合のオッズ比は 0.33 (95%信頼区間 0.13-0.86)、逆に“ビールを毎月飲む”場合のオッズ比は 2.28 (95%信頼区間 1.13-4.60) であった。この結果は、痴呆の中でアルツハイマー病だけを取り出して解析してもほぼ同様であった。</p> <p>結論</p> <p>毎週または毎月のワイン摂取は痴呆の発症率を低くする可能性があるが、痴呆を予防するためにワイン摂取量の増加を勧めるべきではない。ワイン中の何かの物質が痴呆を抑制しているのかもしれないが詳細は不明である。</p>	